

大東文化大学大学院の通訳プログラム

—その理念、プログラム・デザイン、実践—

近藤正臣

(大東文化大学)

This essay describes the conference interpreter training program at the Graduate School of Economics, Daito Bunka University in Tokyo, the first post-graduate program of its kind in Japan. It explains its origin, program design, and actual execution in a humble hope of possibly providing some suggestions to many such programs now in existence.

At the 20th Anniversary Symposium of the Division of Translation and Interpretation, Monterey Institute of International Studies, I was shocked to see that there were many solid post-graduate training programs in Asia Pacific region, all of them having Japanese as one of their languages. I felt a strong moral and professional urge to correct this shameful imbalance. In retrospect I realize that I had practiced the profession for three decades at various settings, including that of the official interpreter for a Japanese President of PTIT, the International Labor Conferences, and US-Japan Legislator's Committee, and I had become rather sure of my style of Japanese-English interpreting generally a la Seleskovitch's sense theory, rather than the impracticable attempt at word-for-word transposition (which strangely abounds even today). I had also conducted and observed a number of successful training programs in and out of Japan. Thus armed by my experience, I came out with the following points of emphasis in the DBU program: ample hours of practice, including 'interpreting marathon' to replicate an immediately prior conference of a few days' duration as well as practicing the skills at real job settings whenever available; theoretical underpinnings of the style emphasizing meaning and message content of the original; input of some European methods of training; combining knowledge of economics and economic affairs; and completing an MA thesis, among others. I thank all those who have pitched in to make this program a success, and I personally feel gratified to have initiated and played some role in it.

はじめに

大東文化大学の大学院経済学研究科における通訳プログラムは、日本で初めての大学院レベルの本格的な会議通訳者養成プログラムを目指して、1995年に発足した。このプログラムの設立に直接にかかわった者として、その理念、プログラム・デザイン、カリキュラム、初期におけるその実践について報告したい。元の形でのプログラムはその歴史的役割を終えたかとも思える今日、これを改めて振り返ってみることに何らかの意味があるかもしれない。

1. プログラム発足のきっかけ

私がこのプログラムを立ち上げたときの思いはすでにこれまでに明らかにしている(近藤 1990-91; 近藤 2009:144-146, 170-172.)ので、簡単にすませたい。

そもその始まりは、私が1989年12月にMIIS (Monterey Institute of International Studies、モンテレイ大学院大学)において通訳翻訳学部設立20周年の記念シンポジウム(MIIS, 1990)に出席したことである。すでに付き合いのあった学部長のビル・ウェーバーさんから、「とにかく来てみないか」と言われて、冬でも暖かいカリフォルニア州の美しいこの町に、小さな報告(Kondo, 1989)をもって出席した。シンポジウムの大きなテーマはすでに、「翻訳・通訳の教員の訓練」となっていて、「今や、training of the trainers of interpreters が必要だ」とくり返し言われた。後で知ったのだが、ここには Danica Seleskovitch や Marianne Lederer, Etilvia Arjona-Cheng などのほか、村松増美さんも出席していた(村松さんの出席については、議事録に発表の演題だけが載っている)。手話通訳のセッションがあり、私は初めてこれに接した。「通訳には、まず、音声通訳と手話通訳の2大分類がある」という認識にいたるのははるかに後のことである。

MIIS のシンポジウムで私はふたつのショックをうけた。

- (1) 世界(特にヨーロッパ)では、通訳の諸側面について、学問的・科学的な研究が長年にわたっておこなわれていた。
- (2) アジア太平洋地域で、日本語の通訳も含めて、大学院レベルの会議通訳者の養成が行われていた。

このふたつのショックのうち、前者から、本学会の前身、通訳理論研究会を立ち上げなくてはならないと考えるようになった。この間の事情についても(近藤正臣 1990-1991; 近藤 2009: 144-199; Kondo, 2008)を参照されたい。

アジア太平洋地域のいくつかの国において、日本語との通訳者の養成が大学院レベルでなされていることは、端的に言えば、「日本と話がしたかったら、お家で通訳者を養成して来なさい。われわれは日本語でしか話しませんよ」とアジア太平洋諸国に宣言しているようなものであった。アジア研究にも従事し、各地に友人も多かったわたくしとしては、このような状態はどうしても放置してはおけないものを感じられた。

しかし、通訳研究をしようとして任意団体をつくることは、気持ちさえあれば第1歩を踏み出すことはでき、しかも強力な協力者を数人得られて、成功したが、大学院で通訳プログラムを出発されることは、大学を動かすことであったから、はるかに大ごとであった。わたくしが最初に考えたのは、日本でも英語だけで

なく中国語・韓国語・タイ語・ベトナム語・ヒンズー語などの通訳者を高レベルで養成することで、これをもっとも有効にできるのは、国立の諸外国語大学ではなからうかということであった。そして多少はこのための可能性を探ってもみた。しかし、わたくしにその種の力もコネのないことはさておいても、諸外国語大学では「通訳(通訳者ではない)の養成なんて、大学のすることではない」という態度が一般的であった。偶然の機会を得て、国立大学の関係者とこの話をしようと思っても、耳も貸してもらえないということもあった。翻訳をする人は「翻訳者」でも、通訳をする人は「通訳」と呼ばれていた。

次善の策として、わたくしの勤務する大東文化大学における可能性を探り始めた。一番いいのは、新たな大学院として通訳翻訳研究科を新設して、ここに各国語の担当者を集めることであった。しかし、こんなことはわたくしの学内政治力のはるかに及ばないことであった。第一、直接的に関係することになる外国語系の先生方の協力が得られそうになかった。くわしい経緯は省くとして、結局、当時わたくしがすでに所属していた大学院経済学研究科にこのプログラムをあたらしい科目として設けるしか実現の可能性はないことがわかってきた。海外の友人たちにこの点について相談すると、ヨーロッパではデンマークのオルフス経営大学院に会議通訳プログラムがあること、経済学は会議通訳者のもつ背景としてはきわめて重要かつ有利であると、多くの励ましをうけた。

そして経済学研究科内では、あまり反対はなく、かえって、高度専門職の養成として意味があるとされた。また、質問を出していただけることで、わたくしの意図を説明する期間をわざと作ってくださった方もあった。事務のスタッフにも、設備を整えるにあたって多くの協力を受けた。このような新しいことをしようとするれば、必ず足を引っ張ろうとする御仁がいるのは、もう世の常であろう。このようにして、この大東文化大学でのプログラムはやっと陽の目を見ることになった。こうした経緯についても近藤(2009: 170-172)を参照されたい。

2. プログラムの理念・デザイン

2.1 わたくし個人の準備段階

いまになって考えると、以下の三つの意味で、私はこのプログラムを始める準備を前もってさせられていたのではないかとさえ思われる。

(1) そのころまでに自分の通訳のスタイルができ上がっていた

一言で言えばそれは、英日・日英両方向、逐次・同時の両形態において起点言語 SL の単語をやみくもに追いかけるのではなくて、ある意味がはっきりつかまえられるまでは言葉を発しないで待っている(多少の遊びのことは使うとしても)、そしてなにかを掴めたらその内容を言語の構造にかかわる部分は起点言語 SL のそれを無視して、キーワードだけは対応するものを用い、どちらかと言えばゆっくりと目標言語 TLを産出するという方法である。同時通訳では ear-voice span(聴取-発話間隔)が平均して長くなった。このスタイルで、聴いていただいて方がたとえたとやすく発言内容をメモできるなど、かなりの自信をもって SL のメッセージは残らずに伝えられると言えるようになっていた。「わかりやすい」と、何度も言われたことがある。国務省で通訳を始めて以来、途中で途切れた数年を除いて、ほぼ 20 年が経過していた。

さらに、この間には ILO 総会、PTTI(国際郵便電信電話労連:いまはその後の組織変遷で CI となっている)の種々の会議(6 年間余におよぶ日本人会長山岸章氏の専属通訳を含む)を体験することができた。この間に、ヨーロッパの同僚たちのスタイルをたっぷりと見ることができ、逆に、リレー通訳において、私の

日英の通訳からフランス語、スペイン語、ロシア語、中国語などに訳される経験を通して、やはりこのスタイルでいいと納得したものである。

(2) いくつかの養成プログラムを知るようになっていた

このプログラム発足までに、海外のものを含めて、いくつかの通訳者養成プログラムを拝見する機会を得ていたし、いくつかの養成プログラムを実際に自分でも体験していた。その中で特に意味があると思うのは以下のふたつである。

(a) キーンズランド大学(オーストラリア)の MAJIT(Master of Arts in Japanese Interpretation and Translation)

数年間にわたって、卒業試験・NAATI 資格審査試験の外部試験官を務め、担当教員と親しくなり(実は MAJIT を立ち上げようとしていた教員ふたりには、発足前に多少の相談を受けていた)、MAJIT の教育内容についてよく知るようになった。印象深かったことを列挙してみよう。まず、7~10名の受講生に専任の担当教員(翻訳担当を含む)4人ほどがつき、受講生は、毎日数時間の contact hours をもち、宿題は毎日山のように出て、授業が終わると日英語の各種辞典をそろえた学習室はただちに満室になり、限られた部数しか置いてなかった紙の辞書を奪い合う状況であった。また、毎週金曜日には、同キーンズランド大学の教員が講演者として呼ばれ、これを逐次・同時で通訳するという科目があった。受講生は、種々のテーマについて、事前にその講演者と連絡をとり、内容についての準備をする。テーマには自然科学・医学を含み、たとえば、産婦人科の老教授が熱のこもった講演をし、学生たちがそれを通訳するのを見たことがある。実際に通訳を担当したのは2年次生で、1年次生は聴衆の役割をしていて、上級生は下級生を前に実際のパフォーマンスをすることにかなり緊張し、必死になるということであった。

(b) ジュネーヴ大学のプログラム

ILO 総会がジュネーヴで6月に3週間にわたって行われるのを機に、ジュネーヴ大学のプログラムを見学させてもらったことがある。もっとも印象に残っているのは、先生ひとり・学生ひとりの授業で、先生は足を組んで悠然と構えていたのに対し、学生は必死に机にしがみついてノートを取っていた姿である。

また、ILO 本部の会議室には通訳ブースが10個くらいあったので、セッションが始まるといくつかの空きブースがあり、ここにジュネーヴ大学の受講生がいて、マイクをオフにして実際の会議を練習に使っていた。マイクをオンにするだけで、自分がこの会議の通訳を担当することになるという、現場にもっとも近い設定と言えるであろう。

(3) わたくし自身が養成プログラムにかかわっていた

わたくしがそれまでに自分が関与した養成プログラムには次のようなものがあった。

(a) サイマル教室(サイマル・アカデミーの原初形態)における専任講師

ここで初めて、これまで通訳訓練を受けたことのない人たちに、そもそも通訳をするというのはどんなことを意味するのかということから説明し、さらに、受講生の話す英語において、母音の [i] の [ɪ] 区別が明確にできていない人、とくに [...dl...] および [...dl...] と連なる時の [i] の発音ができない人がいかに多いのかに驚いた(たとえば、friendly が friendly となってしまう、最後の 1 音節が dream と発音するときと同じの [~dri~] となってしまう)。

日本語を母語とする者にこのふたつの子音を正しく(これら二つの子音を混同すれば、これはもう明確な誤りである)発音できるよう教える方法(うまく手順を追って教えれば意外と簡単にできるようになる)とか、まじめな学生ほど英文和訳をたくさんしていて、1 語 1 語の対応がくせになっているのだが、それを避けることが必要だし、自然な聴きやすい日本語にする上では必須であること、日英語通訳においても同じ戦略が当てはまると話した記憶がある。

(b) 日本コンベンションサービス(JCS)の集中講義(通称「近藤教室」)

ここでは、すでに JCS で 2~3 年間、実際に現場に出て通訳をしている人たち(言ってみればわたくしにとっては junior colleagues)の間から、毎回、数人を JCS 側が選んで、合宿をして、朝から晩まで、一日中、3~4 日(初回は、9:00~21:00 を 5 日間)に渡って訓練を続けた。この時の経験を報告したのが先述の MIIS の 20 周年シンポジウムにおけるわたくしの発表(Kondo, 1989)であったので、ここから、当時、わたくしが強調していたいくつかの点を箇条書きにリストしてみよう。

- ・参加者の技能アップと、仕事をする中で直面してきた疑問に答えることが目的であった。
- ・わたくしの強調したのは、通訳とは SL の 1 語に TL の 1 語を対応させるのではなく、SL の内容を伝えることだ、1 語 1 語の対応が「正確な」通訳ではないということであった。
- ・SL の議論の流れを意識して分析する、議論のパターンを分析する(時間の流れに沿っているのか、因果関係を述べているのか、例を挙げているのか、など)はきわめて重要だとした。
- ・英語の語法のいくつかは日英同時通訳にとくに有用であることを具体的に示した。たとえば不定詞の用法、前置詞 with の付帯状況を示す用法、分詞構文の用法である。
- ・英語の語彙獲得・固定化のために、自分の built-in thesaurus を作ってみないかと訴えた。

2.2 大東文化大学におけるプログラムの必須要件

このようにして各種の既存の通訳者養成プログラムやわたくしの行った訓練プログラムから、新たに立ち上げる大東文化大学でのプログラムには何が必要かというイメージがじょじょに固まってきていた。最終的には、このプログラムの受講生は、ここを卒業したらその次の日から、高度の国際会議で十全な通訳ができるようになることを目標とした。もちろん、現実的には「次の日から」というのは無理であろう。しかし、少なくとも、大東文化大学のあとで通訳学校に行かなくては実際のマーケットで仕事ができないというような事態は断固として避けたかった。そのためどのようプログラムにしたらいいのか。「こうすれば平泳ぎで世界新記録をだせる」という話を聞き、これを暗記する—これがこのプログラムの目的ではなかった。譬えて言えば、少なくとも日本でのオリンピックの代表選手選考には出場できるだけの実力をもった卒業生を出したかった。

繰り返しになるところもあるが、こうした目的を果たすために必須の要件と考えたものを箇条書きにすれば、次のような項目が含まれた。

- (1) できるだけ多くの実習時間を設ける。多くの日本の大学院での科目は、週1度の授業であった。これでは実際の訓練はなにもできない。実習科目をいくつか設けることにした。
- (2) 修士論文はそもそも必須であったが、これは通訳訓練にも大いに意味があるとする。「通訳に関連のあるテーマを取り上げること」にならざるを得ないが、どんなテーマかに関係なく、修士論文を書くことを体験するのは、その特定の分野の知見をうることに役立つだけでなく、どんな発言であってもその理解にはきわめて有用であると考えた。また、長い人生の間には、どんな事情で「修士号」が役に立たないとも限らない。
- (3) 実習科目のうちの一つは、その担当者の母語が英語で、ヨーロッパでの訓練法・ヨーロッパの通訳市場を熟知した講師であることとし、授業のすべてを英語で行う。
- (4) できるだけ現実の通訳を体験させる。大東文化大学での英語での講演には、その通訳にこのプログラムの受講生をあてる、同大の先生方の論文の翻訳をする機会があれば、これも引き受け、実際にこのような依頼はいくつか来るようになった。さらに、実際の会議を見学する機会をもってもらうことを重視した。
- (5) 通訳とは何かということについての基本的態度として、それは1語1語の対応ではなく、SLの内容を把握して、これを自然な TL で聴きやすいものとするを旨とする。わたくしもこのころまでにはセレスコヴィッチの名前やその理論を知るようになっていた。
- (6) 母語の日本語の強化とともに、話す英語を格段に向上させる。
- (7) 通訳演習室として、できるだけ通訳現場に近いものを設け、補助機材の充実を図る。

このような狙いをもって、現実には以下のような実際のカリキュラムを作ることになった。

3. 現実のプログラムの内容

当初このプログラムは「経済通訳論」と題されていた。「開発経済論」などの命名パターンに従い、しかも、経済学研究科におかれているのだから、たんなる「通訳論」ではなく、「経済」通訳論なのであった。したがって、この研究科への入学試験にも「経済学」という科目があり、本プログラムの応募者も、一般的な経済学の知識・理解を問われた。取得する資格は「経済学修士」であった。

以下、プログラムの内容について、重要な特徴を略述する。

3.1 入学試験

入学試験の中には、経済学研究科応募者全員に課せられる経済学のテストがあった。言語や英文学を専攻してきた学生、あるいは、経済学とはあまり縁のない社会生活をしてきた応募者には、これが負担になることが危惧されてはいた。しかし、この入試科目に合わせてかなりの経済学を、たとえ詰め込みではあろうと勉強して受験することになったのは、結果的には良かったと言えよう。中には、P. Samuelson の 800 ページもある教科書を英語で 3 度も読みとおした受験生がいた。初期においては、これだけの覚悟のあった受験生が集まったのである。

英語の問題としてさらに、cloze test と呼ばれる問題を出した。これは、英文中に空所を作り、その文の意味および語法からみてもっとも適切な単語をあてるといものである。英語の意味の流れおよび英語の自然な流れを会得していればむつかしいものではない。受験者の英語にたいする感覚と言っているようなものを見ることができる。

筆記試験には、受験生全員が受ける英語の試験のほか、通訳論専攻の受験生が受ける別の試験もある。ここでは、①日本の事情について英語で説明する、②海外の事情について日本語で説明するという内容が入っている。それぞれ、それまでの1年間に起きたことを中心に数項目の選択肢をあげて、そのなかから自分が多少とも関心を持っているもので、なにか書けるという項目を選んで答えてもらう。時事問題に対する関心も見たかったが、しっかりした日本語・英語が書けるかどうかをまず見るものであった。

筆記試験を合格すると、面接が待っていた。ここで実際に通訳のテストは行わない。通訳がすでにできるようになっていることは要求しないのである。その代わり、一般的な話題のあと、(日本語を母語とする受験生には)つぎのような英語のテストを行った。面接日の当日、あるいは数日前の英字新聞から、比較的なじみの薄い話題についての記事をもってきて、まず、そこに現れる固有名詞、理解にとつてどうしても必要だと思われる特殊な背景の知識などを最初に黒板に書き出したり説明したりし、そのあと、この記事を試験官がゆっくりと読み上げる(できれば英語を母語とする者がこれにあたった)。受験生は、必要ならメモをとつてもよいと指示を受ける。このあと、この記事の内容についての質疑応答が続く。内容を正確に聴きとつて理解しているかどうか、その記事の implication として明らかかなものがあればそれが推測できているか、それについて明解な意見をもっているか、などが問われた。面接官は3人いたので、質問はいろんな角度からのものが行われ、この遣り取りは日英両語で行われた。

ある英語の passage を理解できるかどうかをその場で問うというこのテストの形式は、実は、わたくしがかつて国務省での随行通訳者になるために受けた試験と同じである。わたくしは今でも、英語の実力を見るにはこのテストは極めて適切なものだと思っている。新聞にある英語を一度だけでも耳にして、その内容をまずは正確に把握できるということは、かなりの英語が身につけているということになると見てよいだろうし、通訳訓練の出発点においてさえ、これができないという弱みをもつてはいけぬ。しかし同時に、それ以上のものを必要とするわけではない。1人の受験生に面接時間45分以上かけた。

このような英語には必ず核になる情報・内容が入っている。時には、さりげなく英語特有の構造をもつ文も入っているし、簡単な構造だけれど、長い文章があることもあり、頭でっかちの主語をもつた文もある。ここでこの情報をきちっと捉えられなければ失格である。いわゆる、「アバウトに分かる」だけでは落第である。近年のオラコミあるいはコミュニカティブ・アプローチを強調した英語教育では、「英文を読んでざっとした意味をつかむことは出来るようになって、きちっと仔細に読んでいくことが苦手に」なり、「漠然とはわかっていても…」となる学生が多いとは、すでに本学会会長の鳥飼玖美子さんが1997年にはっきりと警告していることである(鳥飼 1997: 64)。

もちろん、このようなあいまいな英語の「分かり方」は一般的に言っても危険であるばかりでなく(few と a few の区別、hardly とか rarely の使用法が明快に分かっていなければ、肯定と否定を逆にこつてしまうことも起きる)、これでは通訳はできない。一般的には selective listening (自分の聴きたいところ、自分にとって重要などところだけを選んで聴く)がふつうで、しかもそれで用は足りるが、通訳者はそうはいかない。発言をまんべんなく、しかも発言者の立場という視点から、きちっと理解しなくてはならない。

社会経験のある受験者を歓迎した。日英通訳においては日本の社会・経済の機能・や制度についてのかんりの知識は必須である(日本語は high-context の言語で、SL である日本語の理解も、その文の前後関係の事情が意味を伝えるにあたって大きな役割をはたすので、SL としての日本語の理解も、その英訳も、言語表現をとりまくコンテキストの役割が大きい)。また、明確な目的意識をもって入学してくる人ばかりである。

3.2 カリキュラム

具体的なカリキュラムは、この大学院の通例に従って決められた。その後、多少の変更が加えられているが、ここではこのプログラム開始当初の様子を記しておこう。現在もその骨子は変わっていない(現在のカリキュラムなどについては、大東文化大学大学院事務室(電話 03-5399-7344)より、毎年のシラバスがたやすく入手できる)。主な変更は、「経済通訳論」とされていたものがただの「通訳論」になり、それに応じて、入学試験から「経済学」がなくなったこと、修士論文の書き方を指導する科目ができたことくらいである。たんなる「通訳論」としたのは、実態に合わせた面もあると同時に、より応募しやすいようにした側面もあった。初期の理念から言うと、これは一種の妥協であり、残念なことだと感じている。

カリキュラムの概要は以下の通りであった。

・修了に必要な総単位数は 32 単位で、うち、通訳に関連するものが 16 単位あった。つまり、必須単位の半分は他の科目(すべてがひろい意味の経済学の科目)をとらなくてはならないことになっていた(今は総必要単位が 30 単位、通訳関連の必要単位が 20 単位で、通訳関連以外の 10 単位については、他の研究科の科目を履修して、単位を互換することができるようになっている)。

・カリキュラムの具体的な項目および内容の概観は以下のとおりであった。ひとことで言えば、「経済通訳論」という一般的な科目と、実習 A~D からなっていた。実習 C が英語のみを使い、ヨーロッパの訓練方法を応用していること・ヨーロッパの通訳事情を説明するものであった点を除けば、実習は要するに通訳実技の練習の時間であった。しかも、これら実習 4 科目は、1 年生の時と 2 年生の時の 2 度、授業に出ることを強く要請された(もちろん単位は 1 回目取得できただけで、2 度目にとったときには追加の単位がもらえるなどということはない)。

*経済通訳論:通訳作業についての理論的説明、実際の英日逐次・英日同時、日英逐次・日英同時の通訳訓練など。ここで修士論文の指導もした。

*通訳実習 A:主として、英日逐次・同時、日英逐次・同時の実際の通訳訓練。

*通訳実習 B:主として、英日逐次・同時の実際の通訳訓練。ただし、講師の強みを適宜発揮していただいた。放送通訳の現状、通訳理論、異文化間コミュニケーションについての知見などである。

*通訳実習 C:英語のみを使用して、ヨーロッパでの訓練方法を取り入れた方法で行われ、ヨーロッパの通訳事情をあつかった。

*通訳実習 D:主として、英日逐次・同時の実際の通訳訓練。

4. 通訳指導の力点

実際の通訳指導においてはどのようなことを強調したか？ いくつかの特徴をあげよう。

- (1) 日英語間の通訳においては 1 語 1 語の対応は、日英対照言語学の成果からいって、理論的にも現実的にも基本的に成り立ちえないことを強調した。そしてセレスコヴィッチの意味の理論を基調とした。当時はセレスコヴィッチの名著はまだ邦訳がなかったので、英訳を読んでもらったが、何人かの受講生が「目から鱗」だと述懐していた。
- (2) 誤訳あるいは不適切な訳については、ただそれを指摘して訂正するだけでなく、通訳のプロセスの中から、どこでどうつまづいたかを指摘しようとした。
- (3) 両方向の通訳において、まずは逐次をし、そのあとに同時の訓練をした。逐次では、通訳ノートの取り方に習熟させ、1回に最低 3 分から 5 分の SL での発言をこなせるよう指導した。同時については、ひとりでおよそ 15 分から 20 分間の同時ができるようになることを目途とした。
- (4) 各練習の初めに、できるだけ講師によるデモンストレーションを行った。これで、たとえば 1 語 1 語を対応させなくても、正確に訳せるどころか、はるかに聴きやすい通訳ができることを納得してもらった。同時においては、SL からかなり遅れても、あわてずに、十分に内容を表現できることも、現実に見てもらって実感してもらうことが必要である。通訳ノートの指導においては、講師も受講生といっしょに前に出て黒板にノートを取り、なぜそのようなノートになったか、受講生のノートのどこに不備があるかを指摘した。
- (5) 日英通訳は、初めに日英の翻訳をしてもらった。これはできるだけ間違いのない英語を書く(→話す)くせをつけるためである。日本語を母語とする者は、たとえば名詞の単複・それに応じた適切な動詞の使用、時制、冠詞の用法などが最後の最後まで弱点になる。間違いは避けられないが、その間違いをできるだけ少なくする努力は続けなくてはならない。また、表現・語彙増強のために『英語活用大辞典』および Roget's Thesaurus の使い方に慣れてもらい、個々人の built-in thesaurus を作るよう奨励し、指導した。
- (6) 日英同時においては、いくつかの英語の語法の特徴が非常に役にたつ。不定詞のさまざまな用法、前置詞 with の付帯状況を表す用法、多くの前置詞は目的語だけでなく補語をとることもできることなどは、英語において言いたいことを言う方法を大きく拡大してくれる。とくに日英同時通訳において力を発揮する。英語を母語としない人も英語への通訳を聴くことを考え、比較的ストレートな表現の英語がよいとした。
- (7) 実習 C における英語から英語への通訳の練習は、極めて重要なものであるとした。SL の英語を、その内容は変えずに、しかし同じ単語・表現を使わずに、再生するのである。「意味を伝える」という通訳の基本をくり返し練習することになるだけでなく、多様な英語の語彙・表現を獲得することにもつながる。
- (8) 国際会議において多用される常套語句を多数、紹介した(いくつかの例は近藤 (2009: 7-11) にある)。
- (9) 通訳業においても、いわば industrial secret に類するような訳し方がある。たとえば、Some professors are... と始まったら、「なかには...」と始めるとうまく訳し終えられる場合がとても多い。イディオムの in fact は非常識・怠惰な翻訳者はこれをきまって「事実、」と訳して済ませてしまうが、実は in fact には三

つの別の用法がある。わたくしはそのなかでも、「それどころか」とするのが適切な場合が多いと思っている。こうした、いわば「企業秘密」に当たるものも伝えた。

- (10) 授業の初期において、話す英語の基本を徹底的にマスターしてもらおうとした。英語の発音(とくに英語の子音 [l] と [r] の区別、[...tl...][...dl...] とつながる時の [l] の発音、[p]・[t]・[s]) について、さらに、英語における prosody の重要性について、くどいくらいの指導をし、全員がこれをマスターするようにした。母音のさまざまな発音はたしかにその人の出身地や知的レベルなどを期せずして露わにしてしまったりするが、これは逆に国・地域によって異なり、多様な英語 (Englishes) の時代にあっては、それほど大きな問題とはならない。しかし、子音は英語を英語らしく響かせる上で重要であるし、混同すればあきらかに間違いである。英語への通訳は、英語を母語としない人が多く聴く。この方たちに快適に英語として聴いてもらえるためには、子音のマスターは必須であると考えている。しかも、[l] と [r] の区別も教え方次第で、日本人も十分にマスターできるものである。
- (11) 年度末に大方の行事がすんだ頃、「通訳マラソン」と称する訓練を実施した。実際にわたくしが仕事として通訳をした会議のすべてを音声録音してテープをもってきて(もちろん主催者の許可・協力を得て)、2日あるいは3日間にわたって、ほぼその会議全体を再現し、受講者もチームを組んで、同時通訳を行うのである。わたくしはふたつのチームがそれぞれのブースで通訳するのを適宜、聴いたのみで、最後の総括を除いては、逐一のコメントをしなかった。
- (12) 学内で通訳需要(ときには翻訳需要)が生じた場合には、できるだけ受講生に担当してもらった。また、大東文化大学の先生方が関係している学会などで同じように通訳需要が生じた場合には、受講生を紹介した。
- (13) 通訳の行われている現場を見学することを奨励し、わたくしが通訳をした時には、主催者の許可を得て、傍聴を許してもらった。
- (14) 修士論文を課した。

こうした各科目を担当した者について、一言だけのべておこう。

初期においては、わたくしが専任として「(経済)通訳論」と「実習 A」を担当したほか、多彩な非常勤講師陣がそろった(発足当時、「研究指導 I & II」はなかった)。実習 B・D には水野的さんが当たり、理論の話もふんだんにし、放送通訳の豊富な経験を披露してもらった。そして実習 C を担当したのは、ヨーロッパで通訳をしていたが、何らかの事情で東京に来ている方を探した。初めに担当をお願いしたのは Antje Witzel さんであった。実習 C はその後、Andreas Bateman さん、Bettina Ortmann さんをお願いしている。一時期、どうしても東京在住の適任者がいなくて、染谷康正さんをお願いしたことがある。受講生としては、わたくし以外の通訳のスタイル、方略、準備の仕方、さらに通訳ノートの取り方などを知ることになり、大いに意義があったと思っている。安い非常勤講師料で、教えることに意義を感じて、がんばっていただいたこの方たちには深く感謝している。

5. 通訳演習室

このプログラム専用の通訳演習室を設け、その中に、最低、2 室の通訳ブースを設け、現場の同時通訳装置を備えた。当時はソニーの装置が最適なものだということを知っていたので、これを導入する。さらに、

ビデオレコーダー一式、DVD やビデオテープが再生できるテレビをおき、CNN を視聴できるようにする。学習用に、何代かの音声録音器(当時はまだテープを使っていた)を備える。またこの通訳演習室は、できるだけ現場の国際会議室に近づけるため、通常の机を横に並べる形ではなく、スペースに余裕をもたせて、まん中に丸いテーブルを置き、講師・受講生はその周りに座って、互いの顔が見られるようにし、フロアにも絨毯を敷く。

あとがき

このような形で発足した本プログラムは、現在(2010年)は受講生がいない(受験生はいたが、入学試験で合格しなかった)。それがどのような成果を収め、どのような弱点があったかについては(渡部, 2010)を見られたい。基本的にここに述べたような形では、その歴史的役割を終えたものとわたくしは解釈している。今後は、新たに専任担当者となる田中深雪先生の指導のもとに、あたらしい発展の形をとっていくのを期待している。

今の時点で当時を振り返る機会を得たことによって、とにかく必死で走っていた当時には見えなかったものがいくつか見えてきた。とくに、「私個人の準備段階」としてこのようにまとめることができるかもしれないと思いついたことに、自分でも驚いている。

.....

【著者紹介】

近藤正臣(KONDO Masaomi) 大東文化大学教授。元日本通訳翻訳学会会長。元日本通訳翻訳学会評議員。元 AIIC 会員。

【参考文献】

近藤正臣 (1990-91) 「いま、通訳を考える 1~6」、『時事英語研究』、1990年10月号~1991年3月号(『通訳理論研究』創刊号、1991: 38-49)

近藤正臣 (2009) 『通訳者のしごと』(岩波ジュニア新書)

鳥飼玖美子 (1997) 「英語教育の一環としての通訳訓練」、『月刊言語 特集:通訳の科学』 vol. 26, no. 9, 1997年8月号、60-66.

渡部富栄 (2010) 「大東文化大学大学院の通訳プログラムー通訳専門職教育 15年の挑戦ー」、『通訳翻訳研究』本号所収

Kondo, M. (1989). 'An Experience of Conducting Intensive Refresher Courses for Junior Colleagues,' in *MIIS*, 1990, pages unnumbered, delivered December 2, 1989, in a Session titled 'Interpretation', chaired by MACKINTOSH, Jennifer, Chair of the AIIC Training commission.

Kondo, M. (2008). 'Genesis of the Japan Association for Interpretation Studies (JAIS),' presented at the XVIII World Congress of the International Federation of Translators (FIT) in Shanghai on Aug. 4-7, 2008; reproduced in the *AIIC Communicate!*, Summer 2009, pp. 1-7.)

MIIS, Division of Translation and Interpretation (1990). *Twentieth Anniversary Symposium: the Training of Teachers of Translation and Interpretation: Proceedings*.